大

ミ

オ

ヤ

「如来は唯一りの尊き大御親なれども私共の為に三身に分れて御慈しみを垂れ給うて居ます　法身は一切衆生を産みなす大本のミオヤにて天地万物は其恵みと力とに依つて行はれて居る報身は宇宙最高の処に在して法身からうみなされたる人が信心念仏するに対して恩寵の光を以て之を摂化し永遠の生命と為して下さるミオヤにて　応身は教のミオヤ即ち釈迦牟尼仏である此の三身を合して三身一如の大ミオヤと申し上げます」

「わがみほとけの慈悲のおも　朝日のかたにうつろひて　照るみすがたをおもほへば霊感きはまりなかりけり」

無量壽佛

宇宙と人生

宇宙と人生との関係は先に述べた。之を宗教的に天人合一又神人一致又大我と小我との調和などとの語を以て宗教の定義を示して居る。先に宗教の主体なる人の精神を三階に別ち霊性にして大霊と合一することが出来ることは已に述べた。之よりは客体なる大霊が如何にして吾人の霊性に対して即ち小霊の為めに如何に霊力を与へ給ふかを説く。哲学の宇宙の根本と中心と終局とを宗教には独尊と統摂と帰趣との三義を以て大霊が吾人の為に宗教の客体たる義を明さん。

独尊統摂帰趣の三義。本来大霊の本体は一なれども法則を以て万法を統一摂理すると、勢力を以て万物を生成養育するの両属性あることを明すにある。

（一）独尊

宗教では先づ第一に宇宙に絶対無比なる唯一の独尊の存在を信認し之に帰命信頼するを定むるにあり。是宇宙唯一の活ける大本尊である。其独尊を信じて全力を献げて仕へ奉るのを宗教心とするのである。独尊なる大霊は一方よりは天の法則を以て万物を統摂する故に君王の如くに見え、一面には万物を生成養育して終局に帰着せしむる父親に比して観らる。之が即ち天命とも天恵とも云ふことにもなる。独尊とは国に二の王なく天に二の日なき如くに宇宙には絶対無比の尊神は唯一人である。然るに多神教の如くに無数の神を立つるは神の本体数多くあるに非ず。例へば一日天に在て影は万水に浮ぶが如く、水上に浮びたる光を神と見て万物の中に神を認めて信じて行くが多神教である。又独尊は天体に太陽が中心と為るが如く太陽を中心として諸々の惑星が一定の軌道の下に循環するは大霊の天地万法を統摂するに比ぶ。太陽の能力が地上の生物を生成養育するに例すべし。

本尊觀

宗教上の己が帰命信頼するの本尊観は其人の宗教意識の低きと高きとに依て必ずしも同一ならず。意識の幼稚なる物は神に対する観念も随つて低い。或は太陽を神と為し或は高山霊池に神在りとし又は偶像を神とする如き、肉眼に映ずる自然物の中に不思議の力ありとし之を神と認めて自分の要求を遂げさせて呉るる力ある者と信頼するのである。然して其精神が高等に進むに随つて神の観念も亦高度である。又高度に進みたる宗教の本尊観に其性質同じからず。一神教と汎神教と超在一神的汎神教とである。初め一神教と云ふのは宇宙に唯一の神の存在を信じ真の神格なるものは天に在ます独りの父のみ。其他一切の造られたる万物には本々神の性存在せぬのである。唯聖霊を感ずる性、神に救はるる性あるのみと。

二に汎神教は其反対に一切の衆生は悉く神性が具備して居る故に自己の霊性開顕

する時は自己是神である。即ち直指人心見性成仏にて自己の仏性を開見する外に神の要なし。古仏と云ふは往昔の人が自性を発見して仏と成つたのである故其れを自己の模範とは為すべきものの、仏の救を求めて我に於て何か為んと。

三に超在一神的汎神教とは本有唯一の独尊の存在を信ずると共に一切衆生は皆其大霊の分身たる霊性存するの故に之を開発すれば神と為り得らるる。然れども唯一絶対の本仏の分子なれば亦本仏の法則と霊力とに預らざれば成仏すること能はずと。凭やうに三種の中に於て第三の超在一神的汎神教が吾人の宗教観の独尊説とす。

古今賢聖が宇宙の独尊に対する感想を挙げんに。

明治天皇の御製

例へば人為則の中心たる主権者の如く天則の大威神者を信じて生死命あり罪禍を天に訴ふる如きは即ち宗教心である。畏くも明治天皇には「罪あらば我を咎めよ天つ神

民は我身の生みし子なれば」と御製ありし如き、自己の職責天に在る事を示し禍乱あれば罪を天に負ふものとし福祉は天祐神助と為るが如きは即ち宗教心に外ならぬ。又明治天皇の「朝な夕な御親の神に祈るなり我国民を守り給へと」宇宙独尊なる御親なる天の御恵に依らざれば国民の除災獲福を得ざるが故に祈り給ふのである。天子とは天の子と云ふ若し同じ人間同志ならば人が人の前に生命までも捧げて仕へることは無理である。然るに人間を超越したる天の子たる徳を有する君主なるが故に天命天恵に由て生存する人間たるもの天子の為めに仕へ奉るのは当然である。天子も亦国民を子の如くに思召して愛撫し玉ひて国民の福利を天の御親に御祈りなさるのである。又「眼に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ。」神は神明不測にして肉眼にて見ることは能きぬ。凭る神聖なる神に対しては唯人の至誠心より外に感通することは不可能である。其の故は人の誠は天より賦せられたる性にて虚偽は人間の性である。人間の前には巧言令色以て欺く事も出来るが、神の前には決して通る事を得ぬ。神に対

しては天真なる至誠を以て通ずる事が能きるのである。宗教は其至誠心を発揮して神意に合一する処に生命あるのである。賢王聖主にして天神に合一するの信仰心有す。又至誠の信仰は人の精神を神とするのである。苟も人格を具する者は必ず神を信ずる性を有て居る。

孔夫子の天道

例へば水月感応の喩の如く人の心水澄む時は天の霊月感応す。孔子の如き至誠至善なる人豈神性なからんや。孔子は天道を畏れ天命に随へと云ふ如き、天には実に誠に畏敬尊信すべき神明の存在を信じ又道徳の淵源をも天道に基き人間には天命の性として天道に順ふべき様に性情を禀けて居る故に天命の性に順ふ行が即ち道徳である。天道を畏れぬ人間は人慾の私を以て自己を定めて居る故に到底凭る輩には実に道徳の行るる筈はない。孔子が門人の子貢に対して天何と言はんや四時行はれ百物生ずと

天何と云はんやと曰ひし意は天は言にこそ顕はさざれども其号令は草木に至る迄も及ぼして居る。春は芽ばえ夏は茂り秋は実つて冬は蔵む。意識なき植物さへも天の命令に随はざるを得ぬ自然の性を有つて居る。況んや理性あり物の真理を識り感情あり義務を感ずべき人として天の命に順はずして可ならんやとの仰せである。又孔子は罪を天に獲る時は祷るに所なしと。例へば魯の王侯の意に触れて魯国を追放されても斉の国に行つても生活は出来る斉国より擯斥されても亦他の国に移住する事が出来る。然れども若し天より罰せらるる時は誰にか訴へんと曰はれた。又或時匡人が孔子を襲ふた時に子は従容として曰く天徳を予に生ず桓魋夫れ我を奈何と。桓魋は王侯である。仮令王侯の尊さと雖も我は人の権威には服せぬ若し夫れ天命ならば我身は悦服すとの意である。孔子が天を重じて人権の下に屈伏せざるは蓋し天を信ずること強きが故である。凭の如くに孔子は天に人格的の神を認めて居るとは思はれぬが天道を畏れ天命に随ふべき信仰を有つて居られた事は疑はれぬ。

教祖釈迦牟尼

我教祖釈迦牟尼は生身仏である。生身仏の釈尊は法身仏を独一無二の尊き物として説いて居る。孔子の天に対する夫れとは大に其趣を異にして居る。孔子は自然教的に天を畏敬なされたが釈尊は唯天道を畏るる物として自然的に服従は出来ぬ。宇宙秘密蔵を開きて其の日月摩尼宝王殿の金剛坐に永しへに在ます毘盧清浄身と自己と一体二身の真理を発見せざれば止まずと云ふ如き理想に向つて突進して絶対独尊一切真理の源を発見された。釈尊は本王家に生れ尊きこと天子の嗣位、富四海を保ち栄耀栄華を一身に集むる程の位置に身を受け乍ら夙に生老病死の無常を悟り国と位とを棄て山に入りて道を学びなされた。其先太子は生れつき聰明叡智にして疾く五明四吠陀等の深玄なる学に渉り又余の文芸射御に至る迄も学ぶに其奥に達せざるものない。然れども人生問題には深く深く深意を煩はした。尚深思熟考すれば宇宙何物も無常なら

ざる物はない。太子の心中栄花何物ぞ有ゆる王位財宝一切物価値あるなし唯一に切望する処は生死解脱の光明のみ。竟に太子王宮を出で山に入つて道を学び六年間の苦行竟に摩訶陀国の菩提道場に於て樹下石上に端坐し四十九日禅那三昧に入つて竟に一夜内外十魔の競ひ起るを降伏し臘月八日の暁に無明生死の夢醒めて朗然として正覚を成し爰に於て生死の源を尽し煩悩の根を断ち涅槃常恒の光明が現前した。此時に於て釈迦牟尼樹下に在て仏華厳三昧に入て、蓮華蔵世界に盧舎那如来が無量相好無辺の光明を放ち法身大菩薩衆の為に甚深の妙法を説くを観じなされて居る。然れども其の時に余の人々より見れば悉多太子が修行に疲れて樹下に趺坐して安眠する様にのみ見ゆるならんも釈迦が冥想中に観ずる処の霊相は実に甚深不可思議である。そこで釈尊の精神は全く宇宙大霊の粋なる無量光如来にある。無量光如来が即ち宇宙中心たる唯一独尊である故に経に無量寿如来の威神光明最尊第一にして諸仏の光明及ぶ事能はざる所なりと。如来の光明は永しへに十方世界を照らし一切衆生斯の光に触るる

者をして清浄と歓喜と智慧とを得せしめ不断に光明的活動を為さしむるが即ち釈尊の発見し給ひし処の独尊である。釈尊は其れを発見したまひし計りで無く其無量光が人身を以て現れ給ふたのである。其処を孔子の如く畏敬すべき物とのみ見ずして無上の大威神力と共に無限の慈愛を以て衆生の父たり君たり最も尊く最も有難きものにまします。

独尊たる如来は空間に徧照して遺りなきが故に無量光と号け、時間的に永恒不滅の故に無量寿と名づく。即ち一切諸仏天神の本地一切万法の淵源に在ます。

仏教に宇宙の宗教とする処の大霊を号くるに教多の名号ありと雖も今は無量光如来の名を以て独尊とす。如来は衆生の精神生活に対して心霊界の太陽である。太陽の光熱化に由で地球の万物が生存し得る如く如来は霊界の太陽として霊的生命として大恩寵者である。

信仰の本尊

宗教は自己が帰命信頼する所の本尊を定めて其れを自己精神の本尊と為して此に全幅を献げて仕へ奉るのが宗教心と云ふ。或道人の話に宗教心の無き人の心は野中の空屋の如くである。本空屋である故何人が其屋に止宿するとも之を制止することがない。時には雨止みの為めに通常の人が休息して居る事もあり又盗賊が宿ることもあらう。若し又佗の人が一夜の宿に困りて其屋に一夜を明さんと先に盗賊の潜み居るを知らず其内に入らんには残酷な事に遭ふやも知れぬ如く、宗教心の無き人の心は威神光明の主人が存在せぬ故に縁に歴れ境に対しその時々の煩悩に支配せられる。己が心に本尊の主人を迎へて之を戴くことが何より大事である。

(二)統　　摂

大霊は宇宙の大法を以て万物を統一摂理するを云ふ。

統摂と帰趣――一切知と一切能

独尊統摂帰趣の三義と云ふも大霊に体が三あるのではない。独尊なる大霊が一切万物に対して其法則を以て能く秩序を整へ条理を為さしむると万物を生成する勢力とにて、言ひ換ふれば大霊の一切智と一切能との二属性を有つて居る事にて、更に小さく人間に例して云はば知覚と運動の二性を有する人であると云ふ様なものである。

統摂。天地万物が行はれて自然の法則が其常規を違はず細大となく行はれゆくは万物内存の知慧が存在するからである。例へば人間に理性があるから物の秩序が判る如く万物中に自ら完全な理性とも云ふべき性が存在するから天体の星宿が運行するに

も其秩序を失はず如何に細少な生物の生理に至る迄も自然の法則がきちんと定つてゆくのは大霊の一切知が万物に内存する故に物のきまりが立つてゆくのである。

理性的に物の秩序を為し條理を為して行くが一切知なので而して一切の生物の為めに内外の力と為りて自らも活動し外からも力を与へて生成養育せしむるのが一切能と云ふ。是万物が活動するの一大原動力が大霊の勢力より発現するので此勢力を以て万物生成活動する故に万物が其結果として終局に帰着することが出来る。一切知と一切能との二属性が一切万物に対して統一摂理し生成帰趣するの性能となるのである。

法は即ち理法の事にて仏教にて法爾の理と云ひ又自然の理と云ふも同じ事にて、火は熱くして物を焚き水は潤ふて低きに流るなどの総て物理学上に説明する処、物の理法又植物の理と云へば枝葉根茎を為す処のきまり又生物生理の営養生殖の理法にも自然の法がきまつて居る。

眼は色を視耳は声を聴き舌は味ひ鼻は嗅ぐ等の感覚、又苦楽を感じたり物の差別を

識別し得る智慧等の心の理法も皆心理としてきまりて心の働きをなす事、唯識論抔には眼耳鼻舌身意色声香味触法の法から乃至百法を以て人の心理上の相を説明して居る仏教で万物には自然に眼は物を見又火は物を焼くと云ふ如き物理にても心理にても自然法爾の理と云ふ物はすべてに具有して居る事を法とも理とも名づけてある。其一切万法の一大原則であるから法身如来とも名づくるのである。法身は万物に其法爾自然の理を具有して万物を各其理法に随つて其働きを為して摂理するのである。

人為則と自然法

人為法とは国家としては憲法とか又民法商法刑法抔に至る迄、夫々常規を定めて其模型の中に其の義務と権利とを定めて而して其有るべき様に行はせる人為法に、細かに云はば各家庭にも家憲あり家法あり又部落にも部落の規定がある、又大きく言へば万国公法とか又は国と国との同盟規約ある如き、是等は総て人間の便利上相互に練り

合うて相互の義務や権利を完全にする為の約束である。之等を人為法と云ふのである自然法とは又は天則とも云ふ天然自然のきまりである。自然が造化する其巧妙なるを見よ如何に巧なる細工師にても庭に生ずる花咲き匂ふ草一本だも造ることは不可能である。又我々自分の身を以て試みてもさうである。吾自己の眼耳等の五官五臓六腑如何なる細かな処迄も実に巧妙なる器械的に不思議な機能的に出来て居る。然して其活人が種々の事を造作し思惟し発明し百般の働きを有つて居る。是誰の親の細工でもなければ自己の技巧でもない。即ち万物内存の一切知から自然の造花となると云ふより外説明出来ぬ。故に大霊に一切智は具備して居ると云はざるを得ぬのである。自然は解剖学生理学数学等総ての文明的科学が完全に備はつて居なければならぬ様に万物を造作するでは無いか。自然其の物は何かは知らず人間の方より観れば自然に一切智具備し居る様に見ゆるのである。

因縁と因果

大霊が自然界の万法を生成するに因果の律を以て万法を為す。仏教にては因縁因果の関係が万物を成すと説く。因縁とは空間的に我と彼と相互に相扶けて大は天体にも太陽と地球との関係の如く又総ての惑星は太陽との関係を離れて独立する事能はず。天体の一切の星宿も我彼相扶けて網の如くに空間に広がる。之を因縁の関係と云ふ。時間的前後離るる能はざる関係に相続するを因果法と云ふ。若し之が生物界に於て雄を因とし雌を縁とし父は発生の原因にて母は養助の縁と為る。因縁和合して子と云ふ実を結ぶ。即ち父母は因にて子は果である。子に結びたる果が追々に成長の後には又華開き果結びて子々孫々因果相続す。

此因縁は原始に一夫婦より繁殖拡張して広く世界に漫延し堅に子々相続して原始の規定より襲ぎ伝へて因果的に相続す。此等は生物が因縁因果の理法を以て天地万物

を成す所以である。此因縁因果の理法は唯生物の生理的相続の上にばかりでなく、仏教にては神識所謂霊魂上に因縁因果の関係を説く。即ち善因善果悪因悪果と云ふ事なので、儒教等に死生命あり富貴天に在りと云ふて人の善悪運命を天分なりと説くとは異なりて人の性は善にも悪にも福禍にも何れにも成り得らるる性を有つて居るので幸と不幸と凡ての運は自業自得の因果法を以て定められて居る。自己の心から善の業作を為せば其は原因と為りて楽しき果報を得らると。そこで法身から受けた個々の心が善悪迷悟の発達する方面の如何に依つて凡夫聖人と三悪道の苦と三善道の楽との十界と成り得らるるものとす。夫が神識の因果法と云ふものである。

衆生法と仏法

法華経の妙法と云ふも矢張り宇宙大霊が万物を摂理する処の理法を云ふのである。実に宇宙万物は大霊の妙法に由て生成して居るので天地万物何物かは妙法ならざる物

やある。鳶飛んで天に至る魚の淵に躍る、天何とも云はざれども四時行はれ百物生ず是妙法である。花の紅柳の緑、法の法位に住して世間の相は常住である。

妙法の本体は即ち一心である。衆生の一心は即ち大霊の分子である。大霊を根底とする我等が心には本来迷悟善悪十界の性を具して居る。一心悟の光明顕はれず迷の闇に在て生死に流転するを凡夫と云ふ。即ち衆生である。衆生が善悪の心の用ひ方如何に由て三善道と三悪道との六道と別るる。六道の中に種々無量の差別の相と性とに別れて種々の苦楽禍福を異て受くる是を衆生法と云ふ。即ち無明の闇に在つて生死に流転するのを云ふ。衆生は霊性具有して居るけれども其霊性の光が顕はれずして無明の闇に迷うて其中に貧富の別はあれども唯肉体の生活にのみ止まつて居るのを衆生法と云ふ。仏法とは人の精神が高等に発達して最終の霊性が開発して聖者の光明顕現して大霊と合一することを得るを仏法と云ふ。妙法が自ら識らず生死に有りて迷ふを衆生と云ふ。妙法を自覚して霊光覚然たるを仏法と云ふ。大霊が万物を統摂するに

衆生法を以て生物を劣等状態より益々高等に進化せしめ衆生の心が発達して弥々霊性顕現するに至れば終局大霊と合一せしめる処の理法を仏法と云ふのである。悉く大霊の理法が一切万有をして統摂する所以である。

小は大に下は上に統制せらるる理

大霊が一切万物を統制するに小なる物は大なるものに、下なる物は上なるものに統制せらるる理法が存在す。今自身の中にも実に小なる一毫も数多の細分子を聚めて之を統制して而も毫と云ふ一自治体を為して決して佗の部分とは混雑せぬ。又爪は爪てふ同類分子を聚合して自治体を為し居るけれども其上の指に支配せらる。五本の指も其佗と共に合して手てふものに支配せらる。眼耳の五官胃腸等の五臓六腑四肢等の各部は各数多の細胞等を聚合して各自の一肉体を為して居るけれども一の身体に統制せらる。各個人は各自己に統制せられて居るけれども上に一家に統制せられて居る。各

家々を数多聚めて一の町村に統制せらる。各町村は幾十の数を合して県に制せらる。各府県は合して一の国家に統摂せらる。又各国は各自治体統制自治より万国合して一の地球に統制せられ地球等の諸惑星は総て一の太陽系に統一せられて居る。斯の如きの小なる個体は幾千の聚合して其上なる物に統制せらる。次第に展転して最終の統一者は宇宙全体を通じて摂理する処の絶対の大霊即ち法身ビルシヤナである。

法爾の理と云ふ事

法則の主権者。例へば人為則に於ても国家の法則を立憲的相互に練合ふて国民の福利を得る様に法則を立るに就ても帝王とか大統領とかの主権者を戴いて其の裁可の下に法則に権利ある如く自然の大法則に於ても自然の大主権者が無かる可からず。こは国家為政の範囲でなくして即ち宗教の範囲である。宗教は宇宙大自然の法則から割出して人類の精神生活を規定する性である故宇宙万法を統摂するの大主権者即ち宗教の

謂ゆる天の父、神、又如来と名くるものである。先に云ふ独尊である。

大法を以て自己を統摂す

大霊大法を以て自分を統摂して行くのが宗教心である。云ふ換ふれば神の命令に随順して自己の行為をするのが宗教心である。如来は神聖である。真理である。其神聖なる命に帰随して自己の道徳律を律するのが、即ち宗教心である。是を自の計らひを捨てて如来の勅命に随ふと云ふのである。起信に「法性に随順して六度を行ず」と云ふも矢張り大霊の法則に統摂せらるる事である。

如来心を以て自己の心と為すのは即ち信仰である。已に信仰出来た上は自己は小宇宙小国家なると共に大宇宙大国家の縮小である。大宇宙に天則に由て統摂せらるる如く小我なる自己精神も又法則に随順せねばならぬ。視よ天体の天則秩序紊さず行はれ在る如く自己の精神も霊性の太陽赫々と照臨して光明の中にすべての感情意志五官

等に自己の不道徳の情意を制して、如来の光明は天に太陽が赫々と照せる如く、自己心霊の光明を以て自己の動物欲感情意志等を統制して真理の標準に向つて進み、すべての誘惑に打勝つ如きは、即ち大霊と合したる宗教心なので、又国家の政治が正法を以て国を守る時は人民も安穏に各職務に力行することを得るが、若し政なく白昼尚強盗横行すれども之を制止する事能はざる如くに小国家なる自己の精神に霊性の帝王無く之を修むること無く忿怒貪戾嫉妬高慢懶惰等の煩悩賊が横行するも之を制止する法無き如きは即ち小国家なる人格の亡国なので即ち無宗教者と云ふのである。

仏教にて法性に随順して波羅密を行ひ、又は波羅提木叉の光によつて自己の道徳律となす如き即ち宇宙の大法を自己の道徳秩序の光明として行くのが即ち大法に統摂せらるる人と云ふのである。

義務と権利

宇宙の大法を以て統摂せらるる吾人は道徳上に我々は人間としての個人の義務あり責任あり之を全うする故に人間としての権利を失はぬのである。又吾人は国家の一員たる義務あり。租税を納むる等国家に対する義務を尽してこそ国民の権利を失はぬのである。若し土地を所有するも其義務たる租税を収めざる時は竟には其土地所有の権利を没収せらる。夫と同様に宇宙の大法に由つて生存する一員たる心霊の義務がある即ち是が宗教心なので宇宙の大法に随順し真理の光明に由て自己道徳律を全うして真理に叶ふべき行為をなすにあり。然る時は仮令胸中煩悩賊が起る事ありとも神聖なる如来光明に依て己を修め大法の命に随うて行為する是義務を尽すが故に大自在なる仏に成る事が出来るのである。

(三) 帰趣

こは大霊なる親が万物を愛育する終局の目的なので即ち親が子に対する目的である

子は親の養ひを受けて霊性開発真善美の極即ち如来の霊界に帰着するを目的とす。

子は親の本に帰る

総て物は力用に由つて働きの結果は原因に還る原因は結果を生む。結果は元因に還る。

伏能と其開発

人生の主体なる我等の精神生命は生理学的に研究すれば先に述べし如く物質常恒流運の精気即ち電子に陰陽の二気あり之が結合して原子と為り乃至分子が炭素化合して元形質と為り分子が結晶して細胞と為る。細胞が更に結合して一体と成るのが生物なので其生物は種々階級を経て人類と進化したのである。然れば元形質の生物太初の微小なる物に伏蔵したる性能より総ての階級の動物と為るべき性能が伏して居るので

ある。例へば杉樹果の核は実に微小なる元形質の結合物で夫を解剖して見ても単純なる元素の結合物なれども之を沃地に播下し其培養宜しきを得る時は天を凌ぐ様な大杉と為る如く其大杉と成り得らるる性能は已に微粒の核内に伏して居つたのである如くに原始生物の生命にも進み進みたる未来は釈尊や基督の如き世界の光明たる大聖人と成り得べき性能を伏蔵して居たと云ふ事を得べきである。

手段と目的

大霊の親は天地万物の設備を以て一切の生物を成すに、進化の終には大霊と小霊との合一すべき目的が在る様に想はる。天地の大なる設備には生物を進化する様に勢力を与へ生物の生命の伏能には霊的生命と成り得らるる性を蔵してある。仮令外部より如何に勢力を与ふるとも生物の性に高等に進化すべき性能があらざれば如何にして高等動物となり人類と為り得る事をえん。一切の万物悉く進化すべき性能の具有する

は矢張り其本は大霊を終局目的とする諸階級の生物と云はざる可けんや。生物の生命が劣等より益々高等に進み更に進化して人類と成りしは即ち大霊が生物界に及ぼす手段と云ふ事を得べし。人類の精神に於て原始人類は精神上の高等なる作用は未だ顯はれず唯肉体の生活に必要なる生理上の精神なる方面に発展して次第に進むに随つて知力も感情も高等に働ける様に成り夫等も手段にして終に霊性開発して大霊と合一し大霊の目的に随順して霊的生命と霊的生活に進入すべきが目的であると想はる。仮令世の学者は如何に云はうも宗教上より人生の目的を観る時は凭く観ぜざるを得ないわけである。

親が子を養育する目的

総ての生物は自己を保存すると共に種族保存の目的として生殖作用を為す。高等動物に至りては其子を愛せぬ者はない。蓋し種族的自己を保存せんとの自然の性情であ

る。人類が其子無きを悲しみ其子を愛して全力を尽して子を養育するは即ち第二の自己を完成せん為めの性である。親が子を養ふのは子には自己と同じく人と為るべき性を遂げさせんが為めである。子は本親より分身したる種性を有て居るから完全に性を遂げた暁には其親と同じ身となることを得る。身体追々成長の或程度親と同じ位に成る時は其が目的を達して即ち親の本に帰趣したのである。人類計りで無く総ての生物が親より分身したる種性成長の後は其親と同位に成り得る時は本に帰つたのである又身体計りではない精神の知識技芸等に於ても修行して増進せざれば其親の精神と同位置に趣る事は出来ぬ。仮令其親は如何に博識強記学者たりと云ふも其子は修学力行の功を積まざれば親の知識と同位置に達することは得られぬ。故に自ら勤勉して進んで初めて親と同じ精神となる。

仏教には一切衆生悉有仏性とて各自は釈迦仏及び一切諸仏と同じ正覚の位に趣る事が得らるる性種が本来具有して居る。然れども之を修養功積み之を開発するに非ざ

れば其性を遂ぐる事が出来ぬ。大霊の顕はれなる如来が本願力を以て衆生を摂取すと云ふは即ち親が子に対する目的なので一切仏性ある物は皆子であるから親は慈悲と智慧とを以て子の霊性を開発して自身と同体の覚位に趣らしめたいと云ふのが本願力と云ふのである。矢張り大霊の親が衆生の霊性に対する目的である。衆生は大霊の本願力に乗じて帰命信頼して合一する時は即ち同体の覚となる事が出来る。

大霊の目的と衆生の向上

大霊は宇宙万有に対して終局目的が有ると云ふ説と又宇宙其物には目的あるに非ずとの説が有るけれども宇宙の一小部分とも云ふ可き地球上の一切生物が低度より高等に進みし進化の過程を見るも生物進化の極は自ら大霊と合一し得るやうに進むことに思はる。進化説等に依れば地上に始めて発したる生物はアミンバ底の物にて動物とも植物とも分ちが附かぬ位の物なれども植物は動物の食物とも成る故に植物の進化は動

物に為になり劣等動物は高等動物の犠牲となり高等動物より進化して人類となり人類も野蛮より文明に進み天然天性の生活より理性的生活となり霊性生活と進み霊性的生活に入つて大霊と合一し大霊の聖意を自己の意志として永遠の生命に入る。即ち大霊の目的が自己の目的となつて一切衆生と同一の生命として光明生活に入る。此を涅槃と言ふ。仏教の終局の目的は生死を超絶したる永遠の生命なる涅槃に入るにあり。

涅槃

仏教にて大法に随つて向上する終局を涅槃と云ふ。此の無上正覚を得て涅槃に入るを目的とす。

通じて仏教にて人生が自己最終の奥なる霊性を開発し、大霊の目的なる大小両霊の合一したる処即ち人類が生死の迷を超絶して絶対永遠生命に帰趣するを涅槃と云ふ涅槃とは生死生滅を超えたる永遠常住の霊界、諸〳〵の聖者の安住する処を云ふ。涅

槃に入りたる精神状態は常恒の平和と永遠の生命と一切の煩悩を寂滅したる唯幸福と光栄との光輝く処である。自然の歓喜と妙楽とに充満せる処の故に極楽とも名づけ常恒に智慧光明の照す処の故に寂光土とも号く。無尽の荘厳不可思議である故蓮華蔵世界とも名づく。常恒不変自然の大楽自由自在清浄微妙の霊的生命永遠不滅の故に無量寿界とも云ふ。是終局目的の帰趣する処である。

有余涅槃と無余涅槃

涅槃の相状は既に論説したり。然らば爰に至るは此肉体の生命終つて然して後の未来に往生する処であるか。将た現世に於いて入らるるものかと云ふについては凭うである。

釈尊已前の宗教には死後の極楽を以て永遠の目的とするにあれども釈尊の発見なされた極楽は現世未来の別なく唯従来の精神生活の生死の凡夫であつた精神が一変して

無明の夢醒めて光明発見したる時が此所を去らずして即ち爰に於て涅槃光明界の精神に入る事が出来る。有漏の穢身は替らねど神は浄土に栖遊ぶと云ふ精神状態と為るのである。其状態を有余涅槃と為す。即ち此肉体を有て居ながら心が涅槃常楽の人と成つたと云ふ事である。而して弥々肉体の命終り全く心霊の光明純粋なる常楽の心状態顕現するを無余涅槃と云ふ。是迄は精神だけが光明界の人なれども形の上には自然の約束に依て生理上の苦悩は有つて居つたが無余涅槃に入る時は無為常楽の都に入るのである。

選択本願

大霊が衆生を終局目的に摂め入る事を宗教的に如来の本願力と云ふのであるとは已でに述べた。大霊が自己の目的に摂取するに選択の理法がある。選択とは衆生雑多の中から其理想に適つた物を選び取つて適せぬ物は捨てる事である。其選択は大自然の

中に一切生物にも行はれて居る。先づ生物歴史の行はれ来りし選択の相を述べんか生物が最初劣等な動物の無数の中から正当に進んだ物は選択せられて一階高等の動物に進化したので又無数中より正当に進んだ生物は一階進んで腔腸動物となり棘皮動物軟体動物節足、脊椎と進み、魚類となり乃至哺乳動物と進み各階級に亘つて低度より一階進む毎に一の選択に勝利を得たものが前の動物より高等となり前の動物は糧として生存する数多の中より一級進んだものは自然選挙に及第したのである。本同一の根本より出た生物なれども正当に進みたる物が即ち人間である。亦同じ人類中に於ても正当に進みたる物は文明と為り又個人としては賢人君子となり、完全なる発展を遂げて如来本願の力に選ばれて終局目的なる極楽涅槃常住の都に入ることが得らるる。如来の本願力に如何なる安心を以て、其の聖意に叶ふて永遠の光明に選択摂取せらるる哉は後に述べん。

選択せられたるもの

生物進化の階級中に過去無数の古代から生物は本劣等より漸々に進化した物である と云ふも一切の生物は悉く皆同等に各種類に於て進化する訳では無い。自然の淘汰より選ばるる物は進化し佗は矢張何程の代を経ても何万年立ても猫は猫犬は犬である人間の精神生活に於ても、如来の本願に応じて選ばれたるは涅槃常楽に帰る事を得んも摂取せられざる物は何劫経るとも常楽の涅槃に入る事は能はぬ。然らば夫等の神識は如何に生活して居るか。是を仏教にて衆生無明に覆はれて生死に流転し其の善悪の業に由て三善三悪六道生死の苦を受くと為す。是仏教に六道輪廻説の立つ所以である。

弥陀教義

(一)名目を標す

宗教は宇宙に絶対的独一の神格を信認し、是に帰命信頼して人生最終の希望を請求するを宗致とすれば各宗教は其の神格を標するに種々の名を以てす。今斯教は何なる名を以て其神尊を表すべきぞとなれば、今暫く他の例を挙げて後に今教の神を明さん宗教の客体を通じて神と呼ぶ。而して其の神格を名くるに或は天の父と云ひ。又は天帝と云ひ、エホバ、婆羅門等の種々の名を以て神を詮はしてをる。若し之を哲学の語に云へば真如、実体、第一義諦等の名詞を以て詮はしておる。

宗教は全体自己が人間にて苦楽を感じ生命を有する者の救済を求むる対象の故に、客体なる神も人格的に観て之に全幅を捧げて救済を仰ぐ故に其の対象は最神聖にして

無上の尊敬を以て之に帰命信頼すべきである。

宗教は活ける自己の救済を求むる対象の故に人格の神にあらざれば感情の満足を得ぬ。哲学は宇宙の実体を知識の対象として知らんとする故に実体又は真如と抽象的の理と観てをる。仏教に法身、ビルシヤナ如来と号けて宇宙全体を神とし絶対人格とし之に信頼するは宗教的である。仏教は哲学方面と宗教方面との両面ある学説を有てをる故に客体を説明するに完全であるけれども宗教と哲学とが混同し易い。或人が報身は人格的にして尊とく感ずれども法身は理体で有る故に尊とく感じられぬと云ふ如くに思ふのが即ち混同してをるのである。其の報身に対しては宗教的に人格的に観て居乍ら法身に対しては人格的に観て居らぬ。若し報身が人格的ならば法身も亦人格的に観てこそ終始一貫すべし。其の法身の方は哲学的に理体であると観る如きが即ち混同してをる見方と云ふのである。客体を宗教的に明してをるは即ち密教である。大日、摩訶毘盧遮那如来が一切諸仏菩薩諸天神明の総徳にして亦一切万法の本因であると。

大日経に我即一切の本初と説く如く大日は物心万法の本源にして常恒の存在、絶対の霊体、大日の名を以て客体即ち神を標して居る。今斯教は阿弥陀と云ふ名を以て客体を標す。阿弥陀とは総じて無量にしてまた無限の生命と無限の光明の総徳を表詮す。密教に謂ゆる大日が今教の阿弥陀と同体異名に外ならず。無量寿経の法蔵の酬因感果の弥陀と云ふは此の世界の衆生の為めに本仏の聖旨を示さんが為に迹を垂れて出で玉ひし方便法身である。今形而上の客体としての弥陀は絶対無限の霊体永恒存在の故に無量寿と名づく。光明遍ねく法界を照して一切を摂取し霊化し玉ふ徳を有する故に無量光と名づく。斯教は阿弥陀の名を以て神の徳を詮表す、弥陀とは即ち霊体に名づく。

(二)斯教の仏身

絶対的唯一の如来は無量の身と分現して衆生を度し玉ふ。一法身、二種法身、三身、

四身、乃至十仏身等である。

如来の法体は哲学の所謂真如実体なれば絶対の霊体にてましますれ共仏の身と之の依正色身が相融して万物の中に存在する遍法界の霊体なれども衆生に化用を施さんが為に無量の身を現じ玉ふ。

（一）一仏無量身。如来は本一法身にて法爾本然の自性絶対永恒の存在、万物内在の霊態に在まして、二身三身十仏身乃至無量身と現じ玉ふ。其の所依の本体なる故に一法身と為る。

（二）二種法身―法性法身と方便法身。法性法身は本有無作の仏身にして本来万徳円満して仏自境に在ます。方便法身は法性法身より世界の衆生の為に摂化の門を開かんが為に此の世に出現し給ふ仏である。昔は法蔵比丘と為て本願を建て本仏の聖意を示さんが為に十劫正覚の仏身と為りて衆生を導き本覚の都に帰り父子相迎はしむ。近くは釈迦と現じて衆生を度して本覚の光明を仰がしむ。論に如来に二種法身あり法性

法身と方便法身にて法法性身より方便法身を現はし、方便法身の済度に依て法性法身の許に還らしむ。

（三）仏の三身―法身報身応身。此の三身の説は諸家必ずしも一定せず各其流義に随つて見解を異にす。

法身は宇宙の法体一切万法の一大原因にして世界と及び衆生とは其が天則によりて産出せられたる物。法身は絶対人格一切衆生の父である。一切衆生は皆其子なれば小法身である。夫れと共に小造化である。仏性てふ仏に成り得らるる可能性を有してをるけれども仏性は自ら開発せぬ。衆生の霊性を開発し霊化し玉ふは報身仏の光明である。

報身は全法界の中心宇宙最高の坐に在まして慈智の光明円かに照らして念仏衆生を摂取して聖き人に霊化し給ふ処の尊体である。亦報身仏は一面には万徳円かに備り無量の相好妙色身無比荘厳の浄土に在まし法身大菩薩の為に妙法を説きて他受用法楽

を享受せしむ。衆生が法身より稟たる各自の仏性を開きて霊徳を成就せしむるは即ち報身の霊徳である。

応身は報身より分身して我等霊界の衆生の為に斯土に出給ひ人類に応同する身を以て教ふるに報身の光明を蒙むりて永遠の光明に帰趣すべき真理を以てす則ち是釈迦牟尼である。

（四）四種法身。是密家に謂ふ所にて、自性身受用身変化身等流身。初め自性身とは自性清浄の法身、大日本自の性徳本来清浄の霊体である。四重の中台の自性身である。受用身は報身仏之れに自受用と他受用との二身あり。自受用身とは報身の万徳成就の仏自ら独り内証に於て自ら受用し給ふ法楽である。他受用身とは諸の大菩薩の為に無量功徳の相好身を以て説法教化無量の法楽を受用せしむる身である。変化身とは釈尊八相応化の身を以て衆生を度し玉ふ如きの身。等流身とは天龍八部等の無量の随類の身を現じて衆生を度し給ふ類を云ふ。

若し斯教より見れば悉く弥陀随類分応の身と為す。

（五）融三世間の十仏身。華厳には融三世間の十身仏を立て仏無尽の徳を明す。是仏が宇宙万有の本体を体得し自ら証知し給ふ自境界。仏自らの証得より見れば一切万有は悉皆仏陀身内の有である。仏自証内の万有にして万有内存の仏身である。仏のみ能く証知し給ふ妙境界である。十身とは衆生身、国土身、業報身。（以上衆生世間）声聞身、縁覚身、菩薩身、如来身、智身、法身（以上智正覚世間）と虚空身を加へて融三世間と云ふ

（一）衆生身。証入し給ふ仏より観ずれば衆生が仏の中に融し仏が衆生の中に融してをる。

（二）国土身。国土身即ち山河大地一切満徳皆仏である。

（三）業報身。前の衆生と国土とは前世の業に依りて受たる身今の業報は未来の衆生と国土とを感受すべき性能である。此をも融して仏の中に在る故に即仏身である。

（四）声聞身より法身に至る迄を智正覚世間と号し此の六身悉く仏の融摂する辺より観れば即ち仏身中の六身であつて其中に区別なく此の三世間融合して本体も同一融合せる心より見るも彼此相摂し相融して一体である。仏成仏して此三世間を観ずれば皆融摂して自の境界ならざるは無し。此を融三世間の十仏身、仏の自境界とは云ふ。

一仏成道観見法界草木国土悉皆成仏と説くも内証の辺より見れば同一である。各自は霊性具有す。若し弥陀の光明を以て宇宙法界を照見する時は分に融三世間に証入することを得らる。

仏教の中に各立義を異にするに随つて仏身を談ずること同じからず。故に同体の化用の上に於ても異方面より観るが故に従つて仏身を論ずること同じからず。

密教には大日を一切諸仏菩薩諸天神明の総徳とす。今は密教に謂ゆる金胎両部の大日は即ち斯教の弥陀である。故に十方三世一切諸仏は皆弥陀仏に帰す。弥陀は一切諸

仏の本地仏である。楞伽経に十方諸〳〵の刹土に於ける衆生の中に有ゆる法報仏も化仏も及び変化もみな無量寿の極楽界中より出づと。即ち知る一切諸仏は即ち弥陀の分身弥陀は即ち一切諸仏の本地なることを。

三性分別して如来と万有との性を明す

三性とは（一）如来性（二）世界性（三）衆生性

（頌に曰く偏依の依たる円実性）

如来の法体は即ち宇宙の実体にして本有の自性である。其実体を根底として其れより発現せられたる世界性と其世界性より又展発せられたる衆生性之を三性とす。此三性に若し唯識論の三性の名を仮りて之を配せば円成実性と因縁起性と分別起性となる。如来性又神性とも云ふ是れ円成実性である。如来は絶対無規定の故に円成実性である。如来は真如性にて相待的のもので無い。また第一義諦本然の自性なので

因縁に約束せられて成立つたもので無い。因縁により成立つたものは又因縁によりて離れざるを得ぬ。即ち如来性は本有の霊性にて絶対無限の故に円と云ひ。因縁に依らずして本然本成の故に成と云ひ。永恒存在真実の霊体の故に実と云ふ。如来性は絶対無規定不生滅永恒自存本自万徳円満の霊性の故に円成実性と名づく。実性は本有自爾なると共にまた世界と衆生との万有の所依の原因である。

世界性。　吾人が天地と仰ぎ一切生物の依止する処の世界である。円成実性を根底として現じたるもの世界性は相待に規定せられ即ち因縁相待つて起る処のものである。世界とは世は三世にて時間的に過去現在未来の形式を為し。界とは分界にて空間的に東西等の方角の形式を為してをる。本来世界は絶対の実性を所依として常恒徧動の相待的現象なれば絶対の内面より観れば大心霊の一切知と一切能が内存する万有なれども表面より見れば相待的に空間には因と縁との関係を為し時間的には因果の相関に依て行はれてをる常恒活動の相待的世界なれば万物生滅変化極りなく無常遷流し

て止むことなし。然して世は無常なりと見るも常恒活動と云ふ同一の世界相を消極と積極の両面より観たるに過ぎず。

宗教に現世界に対する観念が種々あり。凡人は人生は幸福のみを希望し世界は快楽の舞台なりに思ひ身は清きもの世は楽を与ふもの世は我物と想ひて唯肉の快楽を貪り名利を欲求して止まぬ。然るに世界は自然の法として世の迷へる人々に満足を与へぬ。自然の理法として空と苦と無常と無我を以て衆生を規定す。又或る主義者は曰はく世は実に生死の苦あり、生老病死悉く苦なり、人は亦煩悩を以て自我とす、実に悪なり。故に此世は実に八苦充満する処、是れ衆生罪悪より感じたる世界なり、実に厭離すべき処なりと。又無常主義者は謂らく生死より乃至世は悉く夢の如し幻の如し実の生死に非ず、唯虚妄幻化の相のみと世界を観じてをる。世に楽天家あり厭世家あり。云何に観ずるも其心に任す。斯教に於ては世界は本絶対なる如来性より発展せられたる一面にして実に絶大なる設備を以て一切の生物を生成す。太陽が星雲の状態

より不断の経営により無数の時間を以て完成し地球を分産し地球が初め瓦斯態より現に一切生物の生息し得らるる迄には無数の時間と努力より成れるもの、吾人は現世界は幸福を享受すべき舞台に非ずして如来性より発展せられたる世界なれば、より以上の高等なる霊界即ち如来本居の光明界に進趣すべき予備の修行すべき道場なりと観れば然る時は現世界は大に意義の存することを知るべし。寿経に此土の一日一夜の修行は彼の浄土に於て百歳するよりは勝れたりとの説の如き実に深意あるものと思ふ。

衆生性。　衆生性とは世界を所依として因縁に約束せられて生成したる機能団体を云ふ。是には世界に生息する一切の生物を含む。衆生は霊性具有する方よりは如来性の子にて、世界の因縁因果に規定せられたる生理機能の生物としては世界性の所産である。仏教には一切衆生の心性は本同一根底より出て而もまた複雑なる因縁因果の関係によりて無数の種類となり種々の階級と為りて発展してをるものとなす。衆生は如来性を根底として之に依止せる世界の上に因縁に約束せられて生じたる生物なれ

ば其の伏蔵の霊性より云はば仏の子にて個々皆小法身たると共に小造化である。それは如何に微小なる生物にても生産作用あるを以て知るべし。斯の如く奥底に伏せる霊性の本能を有するが故に本来に向上すべき勢力存す。然れども生物に対する自然の規定は因縁因果の律に約束せらるるが故に衆生自分で自由に運命を創造することは出来ぬことあり。天然の人は動物的生理に規定せられ遺伝に約束せられ気質に束縛せられ習慣に左右せられて自由を得ることが出来ぬ。

仏教は衆生を説くに内的生活の心を以て根本とす。衆生の心本一大心霊即ち仏性を根底としてまた世界の因縁因果に規定せられたる生物の故に衆生心に十法界の性悉く具有す。十法界とは三悪三善を六道と云ひ是凡夫である。四聖法界は是聖人とす。三悪とは地獄餓鬼畜生にて三善とは修羅人間天上を云ふ。四聖とは声聞縁覚菩薩仏陀是である。此の十界は本一心に具して居て十界は衆生の一心より造り出すものである。仏教の目的とする処は六凡生死の迷界を脱して仏陀の霊界に帰趣するにある。

如来の実体

如来の実体はまた法体とも云ふ。実体とは全体何物であると云ふにつき古来種々の学説がある。実体とは実在を意味することあり。或は事物の形式を抽象して本質のみを表して実体と名くる者あり。又普通の属性や偶性を区別して其の本質を実体とするあり。また実体とは現象の諸〳〵の性質の奥に在る本体にして万有の原因なりと云ふあり。神学にては実体を以て神性を表はし人格的差別を超越するものとす。プラトーがイデーを万物の実態原因とし、デカルトが他に依らずして存在するものを実体とす即ち神であると。スピノーザは自身に依て存在し無限永久必然なる実態即ち神であると。ライプニツツは実体は活動し得る存在即ち力であると。カントは経験により来らず即ち純粋なる概念である、又実体は存在の最後の主体であると。或は実体とは雑多の諸〳〵の性質を総合せる基礎であると云ひ、亦実体は現象の物の種々に変化するに拘

はらず内性不変動のものであると。今の実体とは世界性と衆生性を超越したる実在の第一義諦の如来性を実体とす。実体は世界と衆生とを超越して而も二性の原因であると共に二性の内存である。

実体の本質なる実在につきての諸説は或は人間の意識の境を超越して不可知的であると説く、吾人は自己の意識に現はれ来るもののみを知る実在は不可知的であると。観念的実在論者は実在は観念的のものにて可知的にて吾人の観念と実在とは一体であると。又実在已外に現象なく現象即実在であるとの説もある。

今は曰くは実在は吾人の観念と同一本質にして不断の活動は其の属性にして吾人の意志に比すべく若し吾人の観念と同一本質ならざれば吾人は如来性と冥合すること能はざるべし。

吾人が甚深の観念に入りて冥合して真如と相応するは本質が同一なるが故である。起信論に真如の性は言語道断心行所滅の体なれども唯証のみ在りて相応するとは是

である。

実体論には古来種々の説あり物心二元論あり、唯物論あり、唯心論あり、又唯理論あり。唯物論者は謂らく宇宙を構造する本質は物質の原子若しくは電子が在りて之が永恒不滅にして且其勢力は常恒存在して其の自然律によりて万物を造る。人間の精神の如きも脳髄神経を構造する細胞の作用に外ならずと。故に精神などは物質の副産物に外ならぬ。永恒の存在は物質の原子のみと。観念論者の説によれば心生すれば一切の法生じ心滅すれば一切の法滅す。天地万物の色相は唯心の変現に外ならずと主張す。又唯理論者は云はく物質いかに精妙なるとも物より精神の派生すべしと思はれぬ。また心質より物質の現出すと云ふことも考へられぬ。故に現象の上にては物と心とは異なれども其の実体は物心不二の理体である。之を仏教では真如と名づけてをる。即ち宇宙を包含する処の普遍的概念は変化極りなき中に不変の法則が存在し之に依て万物を成生す。其物質と心質との原因なる統一的存在が即ち真如である。仏教に謂ゆる

真如とは物心不二の理体なれども活動の主体なるが故に心真如と名づけ物心一如の心である。

真如即ち実在は物心不二統一的存在を物質に重きを置て観る者が唯物論者にて心質に傾く観方を唯心論者とす。

心真如即ち実体の本質は物心無礙超時間超空間的にして而も偏時間偏空間絶対永恒万物内存の大心霊態とす。万物内存の故に内に非ず外に非ずして而も内外に偏在せる絶対である。物心を統ぶる故に大霊態とす。之を華厳に総該万有心と云ふ。之を宗教的に云はば法身毘盧遮那即ち弥陀の法体と名づく。一切万法の本体にして一切生起の一大原因である。

内容無尽の性徳

実体の本質は物心無礙の大霊態とは已に論じぬ。如来の実相は本来一如の無相にし

て一切の感覚の相を超越して色もなく声もない。一切の色心の相を離れてをる一如の霊態である。性を越え相を離れたるも無相の相は相として相ならざるはない。即ち実相は無相にして一切の相として現ぜざるはなし。真如本定性なくして一切の性の本と為る。一如の大霊に重々無尽不可思議の性徳を具足して欠ること無し。また其の常恒の偏動より一切の万物依正色心有機無機の物として現出せざるなし。視よ天体の無数の星より地上の万物一として真如の内容より変現したる物ならざるはなし。実体の内容には無尽の性徳を具備し而して一切の万物を産出す故に如来蔵性と名づく。例へば衆生の母体より数多の子を産出する如く一の如来蔵より無量に分身して而して衆生各々の身を以て一切を産出す。密教に所謂胎蔵界の大日と名くるも此の如来蔵に外ならず。然れば是れ宇宙の実体は是れ絶対大なる母胎と云ふことを得べし。大宇宙に比すれば一微塵に過ぎざる此の地球上にも無数億の生物を発生し中に就て人類の如き地球の舞台に出でて悲劇を演じ喜劇を為す各人は優人と為りて互に覧つつ見られつつ

自己の役を務め既に務め終れば地球の舞台に形を隠して幽冥の楽屋に入る。已に幽冥に自を没すれば舞台の表よりは窺知するを得ず。如来蔵の古今に亘り東西に亘り地球上幾億兆の人を出現せしめんやは知るべからず。不思議なるは斯の如く無数の人に各四肢五官五臓六腑等に至る迄人間は人間としての塑を為し乃至一切の解剖学上の組織の如く皆一定の形式にはまつてをる。然してまた是を相学等にて見る方面は容貌の美醜姿勢の如何より眼鼻の格好の如き無数億の人の一として同一相なるは無い。其の身体の一分に属する指紋でさへ幾億万中一として同一紋なるは無いと。実に如来蔵の不思議なる重々無尽の因縁より形成する故に無数億の生物の種類の無尽なると共に其の同一形式の中に於て各其の特殊の相を備へざるは無し。是れ実に如来蔵の不思議なる因縁に非ずや。

独のポールゼン曰く、宇宙の内容は絶対的に大なる頭脳である。人の脳髄の成分たる石灰質と空気中に存在する石灰質とは同一の質料に非ずや故に宇宙は大なる精神で

あると。

人類の脳髄は其の解剖学上の構造に於ても実に巧妙を極めてをると共に其の作用に於ても亦驚くべき働きを有して居る。人が一生に亘りて見聞覚知したる感覚の印象記憶把住の如き雑多なる事理が脳裏に納蔵せられて而してまた縁に随ひ要に応じて再現する様を観よ。世に博覧強記の人の脳には実に万巻の書を容て尚余りあり。また芸術家の天才等の頭脳よりは種々の文学詩歌小説等が極りなく繰り出だされ而して其の文句々が人を泣かせ或は笑はせまた無限の興感を惹起せしむる如きまた一人の脳中に家庭家政等の私務より諸般の公務諸種の事業より乃至宗教上のこと又趣味等のすべてを容れて然も混乱せざる如き、一個の脳に於てすら既にかくの如し、況んや十方三世一切の世界の無量の人数等の有ゆる脳髄を包含して残すこと無き宇宙の一大脳髄なる如来蔵性に於てをや。実に重々無尽不可思議なる大霊脳髄の内容の豊富なること其の極りなき宇宙の一切世界の依正色心無量の世界及衆生をば本自己の内に蔵して之を

現出し、または摂入し生滅変化せしむる等其の変現自在なる妙技は独り大自在者の御手に在るに非ずや。

内容無尽の性徳を具備してをつてその重々無尽の縁起の手を仮りて現出す。其の現出したる中に於て撰ばれたる衆生のみ本居の光明界に摂取せらるゝことを得。其の無尽の性徳よりいかに万物を生摂し給ふかは生摂門に詳説せん。

自然界と心霊界

宇宙の実体即ち如来の法体は絶対にして大心霊態なれども吾人が肉眼にて経験すべき感覚的方面とまた心眼開きて観ずべき観念的方面の二面に区別することを得べし。前者を自然界と名づけ後者を心霊界と名づく。

古来此両界を種々の名を以て詮表せられてをる。此二界の区別は宗教に於ては最も重要なる分界である。

自然界の現実的方面を仏教にて生死界亦は染法界また有為界また娑婆また穢土等と名づけ、心霊界は宗教にて理想の境とする方面にて涅槃界また浄法界または浄土常寂光等の種々麗はしき名を以て表はされて居る。

自然界は絶対界より天則によりて発現せられたる世界と及び衆生の住する所である此の自然界に対して世間種々の見解を異にしてをる。今之に対する二様の見方を挙ぐれば、甲は云はく、此の世界は一切衆生の妄想顚倒の惑業に依て感受したるものなれば、生死苦悩の穢土にして実に厭離すべき所であると。乙は云はく自然界は本絶対なる真如の相対的現象にして天地万物より乃至衆生の色心六根六識より乃至一切悉く如来蔵妙真如性の発現である。然るに之衆生性を覆ふ所の惑と業あり若し之を除きて真霊自性清浄顕示する時は即ち心霊界の人と成り得らる。然る時は此自然界は光明の霊界に進入すべき予備の修行道場なりと観てをる。前は消極の方面より後は積極的方面より同一体の異方面より観るものなり。反対にして実は相扶くべきも

のである。

自然界は絶対より一切智と一切能とに依て発現せられたる相待的方面であつて即ち天則秩序に依て発展せられたる世界及衆生である。天に日月星辰運行し地に一切の生物生存す。此等は天則の下に因縁に約束せられ因果に規定せられてをる。空間的には因縁相依て網の如くに連絡し互に相扶け相擁して結び合ひ、時間的には因果相関して鎖の如くに繋ぎ合て相続して絶えず。世界には成住壊空あり。之を外面的に述ぶれば世界に初め空間に散在する処の物質の原子相聚つて形成したのである。即ち其初めは極めて不完全なる状態より無数の時間を経て漸々に完成せられたものである。太陽の如きも初めは星雲の状態より諸〻の分子が聚合し不断の経営は無数の時間を経て遂に太陽の現状とはなつた。次に地球もまた初め瓦斯態より現に生物を完全に生存せしむるに至る迄には幾百万年かの長日月を以て進化したと云てをる。現に地球上に幾万の生物が分布してをり、また幾多の階級を経て竟に人類に迄進化したので之の人類

にして初めて宗教の生活に入ることを得。自然界の世界及衆生の自然の法則は因縁に依りて生じ因果的に相続し一切生物界の生存競争は古今に通じて優勝劣敗の掟を変せず。何れの地にも適者生存の法は行はれてをる。生者必滅会者定離は古今に亙て換らず老病死苦は尊卑を撰ばず。無常苦空は賢愚を論ぜず。然るに天然素朴の輩は左は思はず。唯此世界を快楽の舞台と想ひ朝に開きし栄華の花は夕べに散りゆく運命を悟らず。唯肉の快楽と利己主義を以て人生の目的と為す。云何せん欲楽は貪れば貪るに随て還りて不満を感じ不足の念が増し来る。此自然は彼等が欲望に満足を与へぬ。天然の人は世界に依属し希望を満すことを得ず常に悶えてをる。

世に理性の能く発達したる人にても真に霊に目醒ぬ人の処世観は此世界は物質的器械的にして物質不滅の勢力永存せる諸の元素の聚合団体でありて人の生命は本より物質細胞聚合の上にのみ活るものなれば人は死すれば本の原子に帰りて其れ已外に遺るものは何も無いと謂つてをる。自然の力は偉大にして迚も人力の如何とも為す能は

ざる処故に人は唯人事を尽して天命をまつ外なしと信じてをる。

又宗教に入りても超然主義の人は謂へらく現世界は濁悪不善の聚合団体にして五痛五焼の苦充満し実に厭ふべき処。此穢悪充満の世界を遠離するに非れば永恒の常楽は得ることが出来ぬ。真の霊福と光栄とは遠き彼岸の十万億土に往てのみ得らるゝと信じてをる輩もある。

光明主義は現世界は本如来性より発展せられたる一面なので地上に生れたる一切の動物も我等人類も同一の根底より性を受けたるも人類已下の動物には精神発達の程度低くして未だ霊の生活に入ることができぬ。人類は精神が已に発達してをる故に如来の光明を被むる時は霊に復活することを得らるゝものである。他の動物は本能的であつて意識的生活に入つてをらぬ故に罪悪の責任も無い。人は高等に進みたるだけに狡猾な罪悪を為す動物であると共に如来の恩寵を感受することを得らるゝ生物である。他の動物の精神は之を鉱物に例れば砂利石や璞石の様な物で、之を琢磨の要も無

い。又いかに磨いても光輝を発すべき性を有してをらぬ。之に反して人の霊は宝石や珠玉の如く之を琢磨する時は霊に復活して永遠の光明に入ることを得らる。故に人類の為には現世界は自己の伏能を開きて如来の光明の生活に入るべき修行の土であつて霊界に進入すべき楷梯の世界と観ぜらる。実に現世界は自己を鍛錬すべき道場である。されば自然の寒熱風雨の障害もまた人為的の迫害をも精神を鍛錬すべき器械と知る時は悪人の毀辱も如来の恩寵と感ぜらる。一切の誘惑と迫害とは尅己忍耐の試験具である。

人類には何人にも染汚と苦悩と無明と罪悪との垢質を受けてをらぬ人は無い。是恰も宝石の璞垢の如くである。宝石若し琢磨する時は日光が反射す。若し人勇猛に精進し如来の大光明に接し霊性覚醒し来りて観ずれば霊の旭光普ねく乾坤を照し身は自然界に在て神は常楽の涅槃界に逍遙することを得らる。

又自然界は唯識哲学に依れば一切の衆生阿頼耶業識によりて自から感ずる処同じか

らず。人類が人類の世界を感見して居る処に在つて動物はすべての事物を人の如く感じて居らぬ。例へばいかに美を極めたる堂閣に於ても蠅は毫も其美を観ずる事の出来ぬ。すべて人間世界の人事上の事は人間に迄其の度が発達するにあらざれば観る事も味ふ事も出来ぬ。人と地獄の衆生と同一処に在り乍ら相互に自己の業識を以て自己の境界のみを感見してをると。此自然界は六道の衆生各々自己の業識を以て自己の境界を感じ経験してをるのであるとは是唯識論の説である。斯自然界の中に心の一つより三善三悪六道の衆生が同一宇宙間に於て自己の業現を見て全く宇宙は凭の如きの相と想うてをる。之れ六道衆生の業感の所見である。

心　霊　界

大宇宙は本絶対界にして不可思議である。吾人は五官を以て経験しつゝある感覚世界を越えて心眼開きて覧るべき方面を心霊界と名づく。即ち生死界を超越したる涅槃

界の事である。涅槃界を常寂光土とも云ひ、或は密厳浄土また智慧土極楽国蓮華蔵世界等の種々の美はしき名を以て表はされてをる。

世に現世界のみにあこがるる幼稚なる宗教意識の人は超然たる霊界即ち美天国又は浄土の存在を知らずにをる。高等なる宗教にして初めて其の目的を心霊界に於いて永劫の生命常住の平和を求む。仏教にて涅槃界と云ひ、また清浄仏界と云ひ、基督教に美天国また神の国と云ふは其実は同一の異方面観と云ふ事を得べし。但し此の心霊の発達の程度に随ひて感見する浄土も亦必ずしも同一ならざるべし。

神の国即ち浄土の所在を説くこと超然教には極楽は西方十万億土と云ひまた天国は高遠なる彼岸に在りと説く。円具教にては浄土は去此不遠の方を取る。極楽を亦涅槃界と名く。寿経に国洹泥の如しまた無為洹泥道に次げり等と。

涅槃界の所在何の処に在るとなれば釈尊菩提道場に於て無明生死の夢醒めて正しく大覚を得給ふとき初めて発見し給ふた。譬へば日光東に登りて乾坤忽ちに照耀し山

河大地瞭然と現るゝ如く如来正覚の時に従来肉眼にて見し処の自然界は隠蔽して絶対の霊界が顕現した是れ即ち本覚真如の無量光明の照せる仏智の妙境界である。そこには常楽我浄の園生に真善微妙の花咲匂ふ処で、即ち釈尊初めて正覚を成して内証に自ら観じ玉ふ処、其処には盧舎那浄満の如来は中蓮台に安坐して千の大世界一一の界に百億の蓮花は其の四辺を周匝し囲繞す。蓮花に各一の釈迦在ます。即ち十万億の世界に各一釈迦在ます。かく眷属の世界に各仏ましまして其を囲繞し給ふ処中台に在す弥陀光明尊は一切諸仏諸菩薩の為に微妙の法を説き給ふ。是れ即ち蓮花蔵界である是れ正しく大乗の釈尊自ら証見し給ふ極楽涅槃界である。

極楽を十万億土の彼岸に在りとの説は実には印度に於て釈尊出世已前に古代よりの伝説なる須摩提のことである。釈尊の自ら証見し玉ふ極楽、即ち涅槃界は実は方域分斉を超たる絶対の霊界のことである。然れども未だ心眼開けざる幼稚なる機類に対しては肉眼にて見ること能はざる浄土なれば去此不遠の浄土に弥陀尊は在しますけれど

も止むを得ず古来の伝説を用ゐて西方十万億土をすぎて極楽に弥陀在ますと説き給ひ既に発達せる機類に対しては阿弥陀仏及び浄土は去此不遠法眼開く時は即ち現前すと説給ふ。

往生論偈には彼の世界の相を観ずるに三界の道に勝過し畢竟じて虚空の如く広大にして辺際無しとは是れ世親菩薩自ら証見し給ふまゝを説きたるものにて過十万億土に極楽を説くは是機類に従ふ方便の説に過ぎず。亦古来の伝説を用ゐるは全く善巧方便なり。

又寿経の説によれば、娑婆世界と見るは是れ衆生自己の業報の所感にて是阿頼耶識の現はれである。浄土は仏智光明の所現の世界なれば仏智不思議智乃至最上勝智の現はれなる仏土である。此理が明かに信知できるときは仏土は全く仏智光明の顕現にて娑婆は凡夫阿頼耶の業感なる世界たるを会得せらるべし。世人浄土の存在を疑ふ者概して謂らく此自然界の虚空中に此の如き広大なる星宿の存在を認むることは出来ぬ故

に浄土の存在を疑ふと。但し今仏教に説く処の仏土は肉眼にて天体に於て発見すべき所在にあらずして法眼開きて絶対の心霊界に於て観見すべきものである。凡夫は阿頼耶の業識を以て自分に相応して宇宙を経験して居る。

釈尊は成道の暁始めて無明生死の夢醒めて霊界を照見し玉ふたのである。此の正覚を成じたる者を覚者と名づく。正に霊に覚醒したる義である。凡夫は生死の夢の中に娑婆と観て居る。夢中の人々は覚醒の境界を見ることが出来ぬ。若し全く極楽の浄土が今生死の夢の中に吾人の見聞し得らるゝ世界ならば此の夢の境界が醒め来る時には実には無きが如し。即ち生死夢中の衆生が経験出来るものあらば浄土も亦生死夢中の境に同じ何の実在かあらん。然れども真実に霊に覚め来らば心眼開けたる処に浄土は現前すべし。プラトー曰はずや凡夫の昼とする処は聖人の夜にて聖人の昼とする処は凡夫の夜なりと。釈尊曰く我れ三界の如くに三界を見ず如実に三界の相を知見すと。

釈尊は五眼具さに備はりて若し肉眼を用ゐて見給へば吾人と同じく娑婆の方面を視

給へども仏眼を以て見給ふときは清浄の仏土を観給ふ。法華経に衆生劫尽て大火に焼かるゝと見る時も我が此土は安穏にして天人常に充満し種々の宝を以て荘厳すと説き給ふ。大火に焼かるゝ方は無常遷流の自然界にて常住に安穏なるは仏眼の所見なる常寂光土の方面である。心霊界としての宇宙は実に不思議である。華厳三昧の窓より見れば重々無尽の蓮華蔵界不可説の荘厳なる依報の浄土に盧舎那如来無量の相好光明を以て法身の大菩薩の為に説法して大法楽を施与し給ふと観ぜらるる。又常寂光土に清浄法身の如来常に大衆の為に説法し給ふと見るあり。是の如き清浄国土は本より法界に周偏して方所を離れたる絶対の心霊界である。処々皆仏土である。

寿経に仏土の荘厳の相を明して云はく、其仏の国土は自然の七宝金銀宝石をもて合成して地とせり。恢廓曠蕩として限極すべからず。悉く相雑厠し転た相入間せり。光赫焜耀として微妙奇麗なり。清浄の荘厳十方一切世界に超踰せり衆宝の中の精たり。又衆宝の蓮花世界に周偏せり。一一の宝花に百千億の葉あり。其華の光明に無量種

の色あり。青色には青光白色には白光玄黄朱紫の光色も亦然なり。暐曄煥爛にして日月よりも明曜なり。一一の花の中より三十六百千億の光を出し、一一の光中より三十六百千億の仏を出す。身色紫金にして相好殊特なり。一一の諸仏又百千の光明を放ちて普ねく十方の為に微妙の法を説き玉ふ。是の如きの諸仏各無量の衆生を仏の正道に安立せしめ給ふ。

是の如きの清浄土は本如来の仏智光明の所現である。娑婆は凡夫の阿頼耶業識の所感である。故に明かに浄土は是弥陀の仏智不思議智乃至勝智の顕現なることを信ずべし凡夫の業識の眼を以て見る時は縦令十万億土の彼岸にゆくとも決して実験しうべきに非ず。娑婆穢土と感ずるのは全く自己の業識の所感なれば暫らく自己を空にして如来仏智の光明中に入て観ずる時は縦令明かに諸仏の如くに無量荘厳は顕現せざるも理想的に観念的に清浄国土に安住するの想あり。若し人弥陀三昧の宝鑰を以て心霊界を開く時は如来は現前し清浄国土は観ることを得ん。若し人心霊開発し心機一転し人

格革新する時は斯有余の依身は従来と異ならざるも心は浄土に安住するの想ひと成ることを得べし。之を有余涅槃とす。有余とは凡夫業より受けたる身を云ふ。涅槃とは即ち仏土極楽のことを云ふ。仏教の最も一大事の関門は此の精神更生する処に在る。仏陀の其の徒及び有縁の衆生を教化し給ひて人格を革新せしむること無量なり。人未だ仏陀の摂化に預らざりし間は如何に高等なる生活を為すも六道輪廻の業を為すに過ぎず。已に機縁熟して教化を蒙むる時は初めに法眼開きて常に如来の前に在り大光明中に安住するの想となり聖意を己が意と為して仏子の行為を以て行為となすに至らん然れども肉体の有らん限りは煩悩を根本的に解脱すること能はず。如来の神聖と恩寵とに依りて常に己に尅ちまた己を指導して如来の指導の光に依りて一路向上す。而して弥々報命尽る時は無余涅槃なる真実の報土に帰す。是れ迄理想の霊境が現実となり来るなり。

心霊界は一切諸仏の安住する処の涅槃界真善微妙の園に常楽我浄の妙花匂ふ処諸仏

は常に涅槃界に在りてまた一方には生死界を度せんが為に常恒に変化分身して衆生を引導し給ふ。

自然界と心霊界即ち生死界と涅槃界とは全く同一の絶対界の中にして凡夫所感を自然界と名づけ霊性開発せる人の所証を涅槃とす。云ひ換れば未だ弥陀の光明に覚醒せぬ人の心の所住が自然界にて已に光明に覚醒し恩寵に復活する人の証入したる方面を心霊界とす。弥々報命尽きる時は曽て理想せし霊界が実現するものとす。

生　摂　論

生産と摂取の中生産門は絶対なる如来性より自然界の世界と衆生とが産出せらるること、摂取門とは世界の衆生を選択して如来光明中に摂取して永恒の都に帰趣せしむることである。仏教哲学には前者を流転門とし後者を還滅門とす。前者は真如を元因として縁によつて生起すること後者は生死の源なる煩悩と業が滅して涅槃に帰還す

ることは前に論じたりき。仏教は哲学と宗教との両面がある。

宗教は生命ある吾人の救度を求むる客体なる故其の対象を霊的人格なる如来とし尊崇し帰命する本尊なりとす。衆生界は絶対なる如来より生産せられたるものとす。故に如来は世界の衆生の大慈父と仰ぐべき絶対大人格である。大人格の慈父である故に産出すとす。是を哲学的に云はば慈父は真如の理と名づける。真如は理体なるが故に生産と云はずして一切万物は真如より縁起せりと説く。宗教の対象は人格的の故に産出すと説く。宗教と哲学との両面を混ずる勿れ。

生産と摂取との関係は経に一切の衆生は本法身より生じて還た法身に帰らざるは無しの義である。若し詳に云はゞ如来は一切衆生の生産の根底としては法身如来とすまた一切衆生をして如来の光明に摂めて永恒成仏せしむる時は報身如来とす。

生産門

（頌に曰く、生産門には法身の、一切智能が天則の、因縁因果の律をもて、世界と衆生を生成す。）

生産門は如来法身が天則をもつて因縁因果の関係を以て世界の方面に向つて産出しまた養成し給ふ義である。

万有生起の原因

仏教哲学には宇宙間一切万物の生起する処の一大原因説に種々の説ある。

基教に依れば天のヱホバの神は天地万物の造主六日間に万物を造りまたアダムイヴを造る等故に天の神を縁起の原因とす。婆羅門教にはバラモン天が万物能造の神とす故に婆羅門天を生起の因とす。仏教小乗教によれば一切衆生生起の原因は自己以外に能造の因あるものでない、自己の業が原因とす。業に善悪あり。是れ六道生死の原因とす。唯識によれば無始法爾として阿頼耶識あり、是が原因となりて外界の客観も

内部の主観も唯一の識より変現す。故に阿頼耶識が一切万物の原因にしてまた身心及び世界を造ると云ふ。又は真如縁起説ありて曰く真如は万物生死の原因なり真如は本来法然の理體にして而も永恒不変の性である。而して是が随縁して一切万物と一切衆生と為ると。又如来蔵妙真如性が一切万物中の原因にして縁に随がひ業によりて天地万物乃至一切衆生の身と心と及び六根六識等を現ず。故に如来蔵が一切衆生生起の原因とす。又密教には地水火風空識の六大が法界に周徧し是が万物の本體にしてまた一切の原因である之れが縁起の本とす。

衆生生起の原因に就いても最も腐心されたのは唐の宗密禅師であつた。原人論は其の研究の発表である。又宗密師はかやうな喩を以て衆生生起の原因を説てをらるゝ本覚の仏性は一つの国王である。其の王が眠りて夢に小さな蟻と為てうろついてをる如く本覚仏性から迷出して衆生と為つて六道に輪廻してをると。此の喩の如きも甚だ真理とは思はれぬ。本覚の仏が眠て夢に衆生に為る程なれば衆生が発心修業して究竟

して仏と成し後にまた眠て生起の凡夫と為ると云ふに帰す。甚だ信じ難い。

仏教に超在一體を立てざる汎神教は一切衆生悉有仏性とて衆生仏性を立つれども衆生個々の其根底なる一大仏性を立てざる故に半面の真理にして満教に非ず。彼等は衆生心を根本として世界及び宇宙の成りし如くに認めてをる。

今は説く吾人一切衆生の生起の一大原因は絶対の大霊即ち法身なる大慈父にて其れより産出されたる世界なので又その世界より産出されたる衆生である。

若し哲学的に云はゞ真如の実性が根本にて其が随縁して因縁起性となり縁起性から発生する分別起性即ち衆生性である。

前者は宗教の故に根本の**ミオヤ**より産出されると人格的に説明し、後者は哲学の故に真如なる理體を根本として理體の故に随縁して因縁性と為る。因縁から生物の個性を産出するものと云ふ。同一の體を宗教的に観ると哲学的に取り扱ふとの別がある。今は宗教的に説明するが故に根本もすべて人格的に観なすのである。

法身毘盧遮那は絶対的人格にて独一なれども形式と内容とありて法身とは形式の方より名づけたので其は天則秩序の一大原則即ち一切万法の本源にて万物一として此の法則にかからざるものは無い故に之を父と観ずべく。内容の方より如来蔵と名づく、物質も心質もすべての原料を具有して其れから一切万物を産出する本體である故に母のやうに観らるる。然れども形式と内容とは同一本體の絶対人格なり毘盧遮那仏である。法身として万法の大原則として天則の秩序を以て万物を生成す。視よ一切の万有に細大となく複雑極りなき中に秩序有り条理あるは法身の則下に行はるる故である。

内容は如来蔵性として自己に無尽の性徳を具備して自己の内の世界万物なれば無相にして一如の大霊蔵より秩序的に世界及び衆生を生成す。

かくの如く如来は法身如来蔵として一切万有の父母たる所以である。

二　属　性

万有の父たる法身の大心霊は智力と意志の二属性を有す。即ち一切智と一切能である。

法身は先に明したる如く現宇宙を離れて処を別にして在るに非ず、法身毘盧遮那は偏一切処にて万物の中に存在す。例へば人の識大が身體中に偏満して居る如くである。故に一切智と能とは大霊の遍動力が万物に内存の能力として万物に秩序あり条理あるは一切内存の理性を有する故である。

宇宙間に有ゆる物は悉く法身の手に係らぬは無い。法身に一切智と一切能とが無くてはならぬと云ふことは僅か地球上の生物の一部分である人類の身體に見るに解剖学から見てもまた生理学また化学等の元素の配分から見ても人の身體の各部を構造する組織学上から見ても有ゆる方面から人の身體及精神生活の機能が実に巧妙を極め有ゆる智と能とがなくてはならぬ事が肯定される。若し人が人工的に活ける人間を製造せんとしたならば数学も解剖学も有ゆる科学の智識を有しまた有ゆる能がなくては

ならぬ。然るにいかに智と能との全力をつくしても活くる人間を製造することは出来ぬ。

ソクラテスが或る日門人を連れて亜典の市街を通る時に非常によく造られた人形を見て門人等が痛く感服して居ると先生が汝等はあの人形を見て実に其巧妙に感服して居るが若しあの人形が眼は視え耳は聴き手は物を捉る足は歩み能く言ひ物を食ひ抔ができる程の物を造る者あるとしたならば汝等はいかに感ずるぞと。門人等曰く若し世にかかる物を造る人ありとせば実に驚嘆に耐へざるべしと。先生曰く現に汝等及びすべての人間は今吾が云ひし如くに造られて居るではないか。何故に汝等は現実の物に対して感ぜぬぞと言はれしとの話あり。人類のみでなく小さな虫にも亦細い草にもいかなる巧なる工師にも模倣出来ぬばかり巧妙に造られてをる。かかる巧妙なる製造は斯の宇宙を離れたる天国に在ます神が土を以て造りて息を吹き込みて造られたとも思はれぬ。万物内存の一切知一切能の作用と信ずる外はない。大霊の偏動力は万物の内

に存在の能力として又万物を動すに秩序あり条理あるは一切内存の理性即ち一切知とす。常恒の偏動は一切能とす。

絶対心霊の一切知と能とは普偏的存在にして一切の処一切の時に存在せざるなし。此を二属性を有する大霊なる法身とす。

大霊の一切知能と因縁因果

法身は絶対の大霊物心無碍の心霊であつて、夫に発展せられたる一面たる世界は相待的である。外面なる世界の方面より見れば万物が因縁に規定せられ因果律に相待て生成してをる。天体の太陽と地球との関係の如きも因縁相待て一切の有機物を生活させてをる。

地上一切の生物の因縁因果の関係は雄を因とし雌を縁として相合するは因縁にして雌雄相合して結びあひたる種子がまた原因となりて児がまた親となる如きは因果の関

係である。乃至一切の有機万物は悉く因縁相合し因果相待ちて横に広く繁殖し縦に子より孫に継続して絶えず。此の外部より来る因果の相関を内面なる絶対の方より見れば絶対の心霊が一切知と能とによりて内面よりする秩序的発展と云ふべし。即ち永劫霊活の大霊が常恒遍動し秩序的に万物を建設し破壊して生養し減滅せしむる内面的一切知能の発展を外面的に眺むれば因縁の相関と因果の理として行はれてをる世界性となる。絶対と世界とは一体の異方面観である。かくして世界の発展は因に応ずべき縁あれば和合して果あり結果が又原因と為りてまた果を為し斯の因縁の連絡は空間より無数の星宿と為り相関して広く天体を為し因果を以て三世に断へず。

此関係に万物相互に因縁に関係し相親み相資け相競ひて増長し発展し、資縁が種因に適せざれば生存に勝へず、因縁相適すれば益繁殖す。絶対の常恒の大活動の建設事業は因縁を以て相養成し因果を以て生滅し世界には成住壊空として新陳代謝は広大なる天体にも常に行はれをる。

是の如き外に因縁因果に現はるる万有は内面に大霊の一切知と一切能との万物内存の常恒活動の秩序的発展として云ふべきのみ。故に一切知能の秩序的発展と因縁因果は一体の両方面より観るものとす。

衆生は法身の子なると共に世界の子

大**ミオヤ**は絶対心霊即ち法身である。即ち大造化である。法身より発展されたる世界性は絶対の分現なれば親と同じく造化の妙用を施して因縁因果の理法により万物を造化してをる。世界の太陽及び地球等はまた親として衆生と云ふ子を生ず。世界は衆生の親なのである。故に衆生を養ふ為に一切の設備を以てす。

法身の一切知と能とは世界には陰陽の二気と現じ又因と縁との二力となり衆生には又之が雌雄の二性と為つてをる。先づ太陽より地球を産出し太陽は常に此地球に対して絶えず能力を与へて益増長せしめ両者の関係は陰陽二気と為りて即ち父母として

衆生てふ子を産出す。是れ地球上に生存する一切の生物である。中に就て人類は最も能く進化したる衆生である。衆生性には法身の大霊より稟けたる霊性とまた世界性より稟けたる衆生性との両性を具有してをる。衆生は此の両面を具するが故に解脱の要あると共に解脱の能あり。若し衆生が本来純に霊性のみにて自ら成仏すべきものならんか宗教の要なきなり。然るに霊性は自ら開けがたく煩悩は独り解脱すべきに非ず。霊性を有すとも是を開顕せざれば何の霊徳かあらん。煩悩霊化せざれば空しく沈淪す此の二性は大霊と世界とに稟たる性能にして之を開発し霊化して初めて霊的人格は完成す。人に此両性あるが故に人は純粋に神の子に非ず。一分は世界の子である。吾人は神の子の霊性を伏蔵するが故に自己に向上する性能を有してをる。然れども一方の衆生性は因縁因果に限定せられて決して自由を許さぬ。衆生性の人としては実に苦空無常無我であつて因果に約束せられ世界の規則に規定せられて自由を得ぬ。

霊性開発し衆生我を霊化して初めて霊的自由を得る。然し乍ら世界性と神性は二元

的に成立するものでなく前に述べたる一切知と一切能とより開展せられたる上の性能である。然らば清浄なる神性より不潔不純の世界性は何に依つて起れるかの疑問を生ずるならん其は次に論ぜん。

法身より生産の順序

頌曰

如来絶対円実性　属性一切知能より
展して世界の相待性　十方三世に相関し
因縁性より再展し　個々分別の衆生性
極小各自の伏能は　互に競ふて進行し
生物進みて人と為り　理霊の二性を発展し
如来は自性絶対の　心霊界に摂せんと
報応二身を現しては　帰趣の理性を現せり

遠求二心は神人の　因縁力の理法にて
光明摂化の終局には　本始不二とは成ぬべし

法身より世界を発展し世界より衆生を産出したる次第を論ぜば先づ一大法は万有の本源にて即ち大心霊である。其属性の一切知と一切能との働きより世界万有を発展したるを若し之を外部より見れば因縁と因果とに形成せらるる世界と及び衆生であることは已に論じた通りである。更に言を換へて云はば法身は大造化の故に其の分身たる世界もまた中法身造物主である。衆生もまた小法身小造化と云ふことを得べし。大法身が常恒の遍動に依て世界を活動せしめ世界もまた常恒の活動によりて衆生を生活せしむ。各位共に全力を尽して生活し活動して止まぬ。絶対に比せば大海の小浮漚たる太陽系に於てもまた下りて衆生に於ても何れも進化の為に常に努力しつつある状態を見よ。先づ太陽が初め星雲の状態より無数の時間を以て自己を完全せんとしての努力の結果は已に成功を遂げて大威力ある恒星を成す。而して絶対者の威力の分身を現は

し而も天体の親として地球と云ふ子を分娩し親の恩寵は子の為めに常恒に力を注ぎて休息すること無し。地球もまた初め瓦斯態より努力の結果は生物なる無数の子を産みて之を養成す。其の地球も高等なる動物を養ふ資格未だ完備せざる間は微小の生物を発生したりき。動物の原始状態に於ても其の初めアミーバ底の生物として世に現はれき。其の極小なる生物にも法身よりの一系統を受けたる性能を具有してをるを以て外縁の許す限りは発達せんとす。其の内に絶対より受けたる活力あり。外に之を助成する機関あり。之が植物等と共に増進し生物を進化せしむる内外の因縁によりて漸次に発達す。かくて無数の階級を経て竟には人類てふ高等なる動物に現化せり。人類も亦原始的なる不完全の状態より漸次に完全に進みぬ。人類進化の目的は他の科学者の方より見ればまた見解を異にするも吾人宗教的立場より云はしむれば生理機能なる即ち肉体は手段にして精神の方面に於て永遠不滅の生命に入りて真の目的を遂ぐる処に在るものとす。即ち人の精神の奥底に潜める最高等なる霊性を発揮し如来の聖旨に契

ふ霊的人格と為り終局は本覚の涅槃に帰着する処に在るものと為す。

摂取門

頌に曰はく。

摂取門には性起なる　法般解脱の徳をもて
衆生を選択摂取して　菩提涅槃に帰趣せしむ

摂取門は初め法身より産出せられたる衆生の進み進みたる終局は如来の目的なる至善至霊の御許に帰らしむるに在り。自力に云ふ還滅門に相当す。還滅とは衆生が惑と業とによりて生死の苦を受くる者が仏法に遇ひ解脱の道を得て生死の源なる煩悩を滅し生死の源を滅するが故に本来の涅槃の真天が顕示するの義である。今は宗教的に即ち絶対大なる親の目的に順がひまた如来は終局目的に摂取せんが為に慈智の光明を以て信念の衆生を引接し給ふ、即ち如来なる親の許に引き取り給ふの義である。

法身より世界の方面に衆生を産出するの方向は初め絶対より相対なる世界の方面に

向て産出され、極大より展転し小と為り即ち絶対より太陽と為り太陽より展じて地球と為りその地球に宿れる最小の生物を以て現はれ極小より又向上し多々なる階級を経て人類と為りぬ。今衆生には三種の親を有す。即ち人の親、天地の親、及絶対の親である。絶対大霊が本源の親なれども直接に衆生を産出することは出来ぬ故に世界の天地陰陽二気の親は有ゆる万端の設備を以て衆生を生活せしむる器具を備へ然もまた人類の親によりて人類の身を受く。吾人の霊性は絶対の大霊の子なれども世界の子としての肉体を有してをる。衆生の身を受くるにはまた人間の親がなくてはならぬ。更に云へば絶対より受たる心霊は天地の元気に受けたる身体無くてはならぬ。この天地に受けたる元気も亦人の親の生理的関係の上に生成せられなくてはならぬ。衆生の身を以て世に生活するに三位の親を有す。何人も此三位の親に依りて此身を受けて人間として生活してをるのである。而して親に依て生産されたる吾人の心霊は絶対大霊なる如来の子である。身体は天地の親に依らねばならぬ。衆生は人の親の手を離れて世界

てふ親に依りて独立し得らるるに至れば身体生活から云はば成功為したる者である。然し尚進みて心霊生活として世界なる親の手を離れて絶対の大霊の親の直接保護の下に心霊生活すべき事を期すべきである。終身親の厄介を離れ得ぬやうでは親の本意でない如くに心霊生活は世界依属の心を超越して絶対なる親の子として超然たる心霊生活たらしむる事を要す。宗教の旨と為る処は実に此に存す。若し夫れ精神生活に於て世界を絶対に依頼するものとせんか、それは永遠の安心は決して求められない。何となれば世界は即ち生老病死免れがたく無常苦空は遁るるに由なく然して精神は永遠の生命と常住の平和を要求す。精神の希望益高遠に人生の目的愈甚深なるに及びて初めて心霊が世界依属の心の真の終局でないことを自覚し絶対の親に依属することが真理であることを識るに至る。吾人の霊性は絶対の親より世界の親に預けられ世界（天地）の親より衆生の親に預けられたるものである。故に人類が人の親に育てられ成年期に達すれば親を離れて独立し心霊は世界依属の心を脱して絶対なる親によ

りて自治自活す。宗教は衆生をして世界依属の心を脱して絶対の親なる如来に帰命信頼すべきの真理なることを教ふ。然して如来は如何にして人々を摂取して本居の都に帰らしめ給ふ哉を示すが此事を説明する所以である。

頌に曰く。　摂取門には性起なる。

性起とは絶対なる如来の自性にて世界性に相対的無明生死の方面である。衆生は本来絶対より其反対の方面に産出せられて居る。即ち世界は相待的に因縁に規定せられ因果に約束せられて光明に反する闇黒涅槃に反する生死に向て流転して居る。如来性より其の反対に向ひて迷ひ出でたる衆生を還た其反待なる絶対涅槃の光明に向て本覚の都に帰らしむる為に如来は絶対の霊なる自性より理性と勢力とを以て衆生を摂取して精神の方向を一転せしむ。是が宗教の一大関捩である。帰元翻迷等の語は之を意味す。禅の大死一番、基教の復活等も同じく此の関捩を云ふ。性起の説は華厳の性起正法品の意によれば自性より他性に迷へる衆生を翻迷して本覚に帰らしめん為に

如来は絶対の自性より世界に出興し給ひつるなり。是に就いては重大なる因縁を以て事が此に到つたのである。更に云はば自性の悟の本家を迷ひ出し六道の他郷に惑へる子等を慈父の本居に帰らしめん為に出で給ふたのである。如来の自性より常恒に波及しつつある理法と勢力を法身般若解脱の三徳とす。此の理法此勢力が即ち神が人の信仰に及ぼすロゴスである。法身とは衆生の迷を解きて真理に契はしめ心霊を顕はす法則である。法身の法に天則的に衆生を成生する約束の法とまた衆生を解脱させる法との二面あり。衆生を生成する理法は即ち法身が万有の原則として此が動く処作す処に条理あり秩序あり総じては自然界に行はれつつある天則秩序となり世界の因縁因果の理法となり以て万物を規定してをる。之の一大理法は実に複雑なる因縁を以て衆生は普遍的にもまた特殊的にも此の総則に規定せられてをる。

此の因果の約束の下に生死に処してをる衆生は此の約束が解かれざれば解脱自由の心と為ることが出来ぬ。人為の法律にも憲法また民法などにて条約を結ぶ如くに自然

界には天則あり。世界万物は皆因縁と因果律に約束せられてをる。例せば天体の有ゆる運行もまた地球の運転の如きも皆自然の法に約束せられて行はれてをる。衆生の中の人類の個々の性格の各特殊的に相違せる如きも或は遺伝に規定せられ或は気質に約束せられ或は習慣に縛られて是等は衆生を規定する法である。結ぶも法なれば又反対に衆生を約束より解いて本覚の郷に還らしむるも亦法である。是れ今云ふ所の法身である。

如来が世界の因縁因果に約束せられて生死に縛られたる者を解きて如来の自性の源に還らしむるには之を解く法に依らなければならぬ。本大法身より出でたる仏性を有する衆生である故に法に称うやうになれば本の父の許に還ることを得る。然れども本に還るべき理法を覚らねばならぬ。是に於て般若と云ふ其の真理に還る智慧を要す。茲に於いて如来は法身の真理を覚らしむる智慧の光を与へ給ふ所以である。

今云ふ般若とは成仏する処の法則である。吾人は法身から分れ出た小法身にて大法

身と合致の出来る理性を有してをる。此の理性を明く照す智慧出るときはかやうに覚り得らるる即ち智慧の光りにて自己を照す時は小なる我本性は大法身の分身なれども世界の因縁に規定せられて存する個体を実の我と謂うてをる。然るに此の我は動物性やまた生物遺伝やまた形気の質習慣其の他種々の因縁より受けてをる束縛を有して居る。此の束縛より解脱するには真理を自覚し又世界に依属する心意より脱却して絶対なる如来の法に叶ふことを得るに至つて始めて心意解脱したるものとす。すべて結ばれたるものは解かざるべからず。絶対は本然の自性なれば悉く解脱して爰に至らば大解脱大自在である。

大なる父は其の子を世界に預けまた衆生に預けて約束の下に或る程度に育てさせ時到れば其の約束を解きて如来自性中に摂取し給ふ。

上来如来が衆生に対する摂取の理法を抽象的に説明したり。更に重ねて宗教的に人格的の如来の光明に摂取せらるべき理を論ぜん。

頌に曰はく、

如来は自性終局の　涅槃に摂取せんが為め
報応二身を現じては　帰趣の聖旨を示します
遠求二心は神人の　因縁力の理法にて
光明摂化の終りには

若し宗教的関係を表せば一切衆生が本法身より受けたる霊性を有し乍ら自ら生死の巷に徨彷ひ罪を襲ね悪を重ね永く闇黒の獄火に焼かるべきを父は子を愍れむの慈愛心より身を分ちて人の世に出て迷子に本国に還るべき道を示し給ふ。釈迦出世の一大事は実に此に存す。三世諸仏の出世も帰する処此に在り。

本有法身の無量寿如来は常恒に自性宮に在せども無明に迷ふ衆生は永く父の本に還ることを知るなし。此に於て本有の無量寿仏より方便法身なる法蔵比丘の身を現じ無量の大願を発し十劫正覚の身を示して衆生大慈の父を念じて至心なれば衆生を摂取し

て浄土に還らしむ。大慈父の許に還て見れば十劫正覚の弥陀は実には本有常住如来に在ませり。論註と如来に二種の法身あり。法性法身と方便法身とである。法性法身より方便法身を出し方便法身に依て法性法身を顕はす。法性法身とは光明名号経に謂ゆる本有法身常住無量寿仏にして無始無終の本地身である。

如来は自性の本国に迷没の衆生を摂取せんが為に報応二身を現し給ふ。先已に三身の説を粗明したるも今重ねて略説せば弥陀は十方一切の法報応の本地にて三身を統一する本仏である。然れども今三身を区別して各其掌どる方面を明さば法身は天則の原則にして自然界に対する一切万法を統一し給ふ絶対的人格の尊神である。目を挙げて天地万物を摂理し給ふ秩序の整然たるを見よ。孔夫子が天何と言ぞや四時行はれ百物生ずと云はれし如く天体の無辺なる星宿の無数なる何れの所にか法則の存せざる所あらん。

大なる法身より発展せられたる世界と為り天体と為り太陽と為り地球と為り人と為

る無量無辺に分身すれども本の一体と不可割の関係ある吾人は本大法身の分子にして縱令世界の因果の法に約束せられ乍らも大法身より稟たる小法身である以上向上の或程度に至らば何ぞ大慈父に遇ふことなからん。

如来なる父は天則の源なる法身仏として我等一切衆生を世界の方面に生成せしめ後には如来の終局目的なる父の許へ還らしめんが為に報身仏を現し給へり。報身仏は一面より観れば宇宙に遍照せる大智慧の光明である。大円鏡智である。宇宙全体に遍照する智慧の鏡である。故に諸〳〵の大菩薩（信仰の人）清き心を以て之に向ふ時は如来の妙用として真金色の身八万の相好光明美はしく七宝の自然の宝を以て荘厳せる微妙奇麗なる浄界に在し其れに応ぜる法身大菩薩の為めに説法し法楽を施し給ふ。大智慧の鏡が法身に周遍するが故に妙色荘厳の仏身浄土も又法界に周遍す。一切の処に周遍する清浄の身土なれば衆生の心清むときは随処に観ることを得。唯衆生業障深くして観ること能はざるのみ。

法身の体と共に報身の大智慧は本有にして無始無終である。所現の仏身土も亦永劫に滅せず壊せず（起信論の意）

報身仏に自受用身と他受用身と有り。自受用身とは如来法界に周遍せる智悲万徳の円満せる身、神秘的に霊妙不可思議なる自の境界に自ら自然の大法楽を受け給ふ身にて他受用身とは法身諸〳〵の大菩薩の為めに無量の相好妙色荘厳の身微妙の音声種々の妙香美味霊触極り無き妙用を以て法界に充満して妙法楽を施与し給ふ。

又報身仏は如来の一大霊力即不可思議の妙用より無量の光明を以て普ねく十方界を照して念仏の衆生を摂取し霊化し給ふ仏にして即はち心霊界の太陽である。喩へば太陽の光熱化の三線を以て地球の万物に対して明と為り熱と為り万物を化育する如く如来は智慧と慈悲と威神の光明を以て信念の衆生の為に開悟と与楽と霊化の力を与へ給ふ。報身仏の妙用は法身より生産せられたる衆生の霊性を開発し霊に復活せしめ永遠の生命円満の霊格を完成し給ふ処に在り。又起信に説くが如くは報身仏は菩薩

浄業の心識にて観ずべき処の霊体にして妙色微妙にして極り無く菩薩の程度丈けに観ることを得益々浄業進みて心の高くなる時は所観の仏身も弥広大となりて菩薩浄心を得また等覚の極に達すれば彼此の相なきに至る時に菩薩が竟に仏となることを得と

即ち報身仏は万徳豊備相好妙色身にして智慧と慈悲の光明を以て一切衆生の信念に対して摂取し同化し永遠に救霊し給ふ尊身なり。

応身。報身仏より分身して地上の人界に出で給ふ人仏釈尊である。報身は宇宙の最高最霊の浄界に在まし衆生摂化の光明妙用永しへに施し給へども迷界の衆生は無明に翳せられて之を知るに由なし。焉に於て浄界の慈父殊に迷没の衆生を愍れみ身を分て人類に応同せる人仏釈迦を現じ衆生に教ふるに報身如来に帰命信頼すべきを以てす報身仏は高き浄界に在して光明を以て衆生を照し釈迦は下界に出て衆生を導きて報身の光明に帰せしむ。是を聖善導は釈迦は此方より発遣し弥陀は彼方より来迎す此に遣り彼に喚ぶ豈に去らざるべけんやと。報身と応身とは掌る処斯の如くである。

摂取門の内に世界の衆生には仏性と煩悩とを両具してをる。戒定慧を以て仏性をば開発し煩悩を解脱して成仏するは聖道にて被摂の衆生は自己は如来を離れて別に我も我が力も有ることなく然るを其の真理を自覚せざりし為に父に背き罪に陥りしも今は父の光に照されて父と共なるを信じ世界依属の心を脱し如来の中に安立を得れば身は娑婆に在りながら神は浄土に栖遊ぶ。弥報命尽る時は全く報土涅槃の極楽に帰せんことを期す。

如来の本体は絶対の大心霊態であることは已に説きぬ。大心霊体には相大と用大の二属性を有てをる。恰も個人の心に知力と意志の二属性を有する如くである。相大とは心霊体の上に明るき衆相なので即ち大智慧である。心霊体が鏡の体とすれば智慧は鏡の明浄に喩へらる。用大とは大心霊の有する能力にて人の意志の如くである。如来の心相は法界に遍照する大智慧の光明である。喩へば日光の遍ねく六合を照破する如き心の光明である。無辺光の四大智慧は個人の心理の観念と理性と認識と感覚

の四分類に例すべきものにて此に法身の四大智と報身の智慧との両方面あり。法身の四智は天則秩序の理性として自然の一切萬法に遍ねく亘れる理性である。四大智慧とは一大観念態と一大理性と一切認識の本源と一切感覚の本源との分類である。

斯の四智が万物に内存して自然界の主観客観の本元と為りまた万有を生成する統一摂理の本源と為りまた因縁相成し陰陽交感し造化の妙用の本源と為りまた感覚作用たる客観の色声香味触の相と為る。此の四智が自然界の一切万象の根元と為る。また一切衆生の知覚も運動も悉く如来四智の万物内存からして吾人の感覚等と為り乃至一切の心の作用の相象を現はせるものである。法身の四大智が万物の中に存在してをるから人類の精神作用も其れが分に応じて顕現したのである。

法身の大**ミオヤ**が一切衆生てふ子等の智を向上させて而もまた更に進みて如来の自境界なる仏智の光明界に帰趣させん為には四大智慧の光明を以て衆生の四智を開発させて如来の自境界の中に摂めて一切の真理を覚らしむ。

更に云はば自然界の物質心質と依正色心の相と為り。また万物を生成する秩序を為したり。或は衆生の五官の感覚と為り外界の五塵と現はるるも悉く此の法身の四大智の分類現象である。また更に進みて如来の浄き法界に摂められて仏慧の眼開けて如来の妙境界を照見し得らるるのは報身如来の四智の光りが衆生の四智を照し給ふたものである。

（以上『弥陀教義』より）